



レイヤ2 インターフェイスの設定

- [イーサネット インターフェイスの概要, on page 1](#)
- [レイヤ2 インターフェイスのガイドラインおよび制約事項 \(4 ページ\)](#)
- [インターフェイス速度 \(4 ページ\)](#)
- [40 ギガビット イーサネット インターフェイスの速度 \(5 ページ\)](#)
- [SVI 自動ステート \(6 ページ\)](#)
- [Cisco Discovery Protocol, on page 6](#)
- [errordisable ステート \(7 ページ\)](#)
- [デフォルト インターフェイス \(8 ページ\)](#)
- [デバウンス タイマー パラメータについて, on page 8](#)
- [MTU 設定, on page 8](#)
- [物理イーサネットのデフォルト設定, on page 10](#)
- [インターフェイス情報の表示, on page 11](#)

イーサネット インターフェイスの概要

イーサネット ポートは、サーバまたはLANに接続される標準のイーサネット インターフェイスとして機能します。

イーサネット インターフェイスはデフォルトでイネーブルです。

インターフェイス コマンド

interface コマンドを使用すれば、イーサネット インターフェイスのさまざまな機能をインターフェイスごとにイネーブルにできます。**interface** コマンドを入力する際には、次の情報を指定します。

Cisco Nexus ファブリック エクステンダ との併用をサポートするために、インターフェイスのナンバリング規則は、次のように拡張されています。

`switch(config)# interface ethernet [chassis/]slot/port`

- シャーシ ID は、接続されている ファブリック エクステンダ のポートをアドレス指定するために使用できる任意のエントリです。インターフェイス経由で検出されたファブリック

ク エクステンダを識別するために、シャーシ ID はスイッチ上の物理イーサネットまたは EtherChannel インターフェイスに設定されます。シャーシ ID の範囲は、100 ～ 199 です。

UDLD パラメータ

シスコ独自の単方向リンク検出 (UDLD) プロトコルでは、光ファイバまたは銅線（たとえば、カテゴリ 5 のケーブル）のイーサネットケーブルで接続されているポートでケーブルの物理的な構成をモニタリングし、単方向リンクの存在を検出できます。スイッチが単方向リンクを検出すると、UDLD は関連する LAN ポートをシャットダウンし、ユーザに警告します。単方向リンクは、スパンニングツリー トポロジグループをはじめ、さまざまな問題を引き起こす可能性があります。

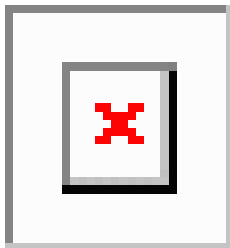
UDLD は、レイヤ 1 プロトコルと協調してリンクの物理ステータスを検出するレイヤ 2 プロトコルです。レイヤ 1 では、オートネゴシエーションは物理シグナリングと障害検出を行います。UDLD は、ネイバーの ID の検知、誤って接続された LAN ポートのシャットダウンなど、自動ネゴシエーションでは実行不可能な処理を実行します。自動ネゴシエーションと UDLD の両方をイネーブルにすると、レイヤ 1 とレイヤ 2 の検出が協調して動作して、物理的な単方向接続と論理的な単方向接続を防止し、その他のプロトコルの異常動作を防止できます。

リンク上でローカルデバイスから送信されたトラフィックはネイバーで受信されるのに対し、ネイバーから送信されたトラフィックはローカルデバイスで受信されない場合には常に、単方向リンクが発生します。対になったファイバケーブルのうち一方の接続が切断された場合、自動ネゴシエーションがアクティブであると、そのリンクのアップ状態は維持されなくなります。この場合、論理リンクは不定であり、UDLD は何の処理も行いません。レイヤ 1 で両方の光ファイバが正常に動作している場合は、レイヤ 2 で UDLD が、これらの光ファイバが正しく接続されているかどうか、および正しいネイバー間でトラフィックが双方向に流れているかを調べます。自動ネゴシエーションはレイヤ 1 で動作するため、このチェックは、自動ネゴシエーションでは実行できません。

Cisco Nexus デバイスは、UDLD がイネーブルになっている LAN ポート上のネイバー デバイスに定期的に UDLD フレームを送信します。一定の時間内にフレームがエコーバックされてきて、特定の確認応答 (echo) が見つからなければ、そのリンクは単方向のフラグが立てられ、その LAN ポートはシャットダウンされます。UDLD プロトコルにより単方向リンクが正しく識別されその使用が禁止されるようにするためには、リンクの両端のデバイスで UDLD がサポートされている必要があります。

次の図は、単方向リンクが発生した状態の一例を示したものです。デバイス B はこのポートでデバイス A からのトラフィックを正常に受信していますが、デバイス A は同じポート上でデバイス B からのトラフィックを受信していません。UDLD によって問題が検出され、ポートがディセーブルになります。

Figure 1: 単方向リンク



UDLD のデフォルト設定

次の表は、UDLD のデフォルト設定を示したものです。

Table 1: UDLD のデフォルト設定

機能	デフォルト値
UDLD グローバル イネーブル ステート	グローバルにディセーブル
UDLD アグレッシブ モード	ディセーブル
ポート別の UDLD イネーブル ステート（光ファイバ メディア用）	すべてのイーサネット光ファイバ LAN ポートでイネーブル
ポート別の UDLD イネーブル ステート（ツイストペア（銅製）メディア用）	すべてのイーサネット 10/100 および 1000BASE-TX LAN ポートでディセーブル

UDLD アグレッシブ モードと非アグレッシブ モード

デフォルトでは、UDLD アグレッシブ モードはディセーブルになっています。UDLD アグレッシブ モードは、UDLD アグレッシブ モードをサポートするネットワーク デバイスの間のポイントツーポイントのリンク上に限って設定できます。UDLD アグレッシブ モードがイネーブルになっている場合、UDLD ネイバー関係が確立されている双方向リンク上のポートが UDLD フレームを受信しなくなったとき、UDLD はネイバーとの接続の再確立を試行します。この再試行に 8 回失敗すると、ポートはディセーブルになります。

スパニングツリー ループを防止するため、間隔がデフォルトの 15 秒である非アグレッシブな UDLD でも、（デフォルトのスパニングツリー パラメータを使用して）ブロッキング ポートがフォワーディング ステートに移行する前に、単方向リンクをシャットダウンすることができます。

UDLD アグレッシブ モードをイネーブルにすると、次のようなことが発生します。

- リンク的一方にポート スタックが生じる（送受信どちらも）
- リンク的一方がダウンしているにもかかわらず、リンクのもう一方がアップしたままになる

このような場合、UDLD アグレッシブ モードでは、リンクのポートの 1 つがディセーブルになり、トラフィックが廃棄されるのを防止します。

レイヤ2 インターフェイスのガイドラインおよび制約事項

レイヤ2 インターフェイスの設定には次の注意事項と制約事項があります。

- 自動ネゴシエーションはサポートされません。
- 1G 自動ネゴシエーションは N3K-C36180YC-R および N9K-X96136YC-R スイッチではサポートされません。この問題を回避するには、速度を手動で 1000 に設定する必要があります。ネイバーで自動ネゴシエーションが有効になっている場合は、それらのネイバーで自動ネゴシエーションを無効にする必要があります。
- Cisco Nexus N3K-C3636C-R および N3K-C36180YC-R スイッチでは、QSFP-100G-CR4 ケーブルを使用して 100G リンクを起動すると、ポート 49 ～ 64 で自動ネゴシエーションが機能しないことがあります。この問題を回避するには、ポート 49 ～ 64 の速度をハードコードし、自動ネゴシエーションを無効にする必要があります。

インターフェイス速度

Cisco Nexus 36180YC-R スイッチには、デフォルト速度が 10 G の 48 個の Small Form-Factor Pluggable (SFP) ポートと、デフォルト速度が 100 G の 6 個の Quad Small Form-Factor Pluggable (QSFP) ポートがあります。48 個の SFP インターフェイス ポートは、25 G、10 G、1 G の速度をサポートできます。6 個の QSFP インターフェイスポートは、100 G および 40 G の速度をサポートできます。

最初の 48 ポートでは、ポート グループの各 4 ポートに同じ速度が設定されている必要があります。一度に 1 つのポートを設定することはできません。エラーが発生する可能性があります。詳細については、[CSCve80686](#) を参照してください。

表 2: ブレークアウト モードのサポート マトリックス

スイッチ	4x10G	4x25G	2x50G
N3K-C3636C-R	はい	はい	はい
N3K-C36180YC-R	はい	はい	はい

40 ギガビットイーサネットインターフェイスの速度

Cisco Nexus 3600 プラットフォーム ポートでは、QSFP ポートを 40 ギガビットイーサネットモードまたは 4x10 ギガビットイーサネットモードで動作させることができます。デフォルトでは、49 ～ 54 の番号が付けられた 6 つの QSFP インターフェイスポートがあり、40 ギガビットイーサネットモードで動作できます。これらの 40 ギガビットイーサネットポートには、2 タブルの命名規則で番号が割り当てられます。たとえば、2 番目の 40 ギガビットイーサネットポートには 1/50 という番号が割り当てられます。設定を 40 ギガビットイーサネットから 10 ギガビットイーサネットに変更するプロセスをブレイクアウトと呼び、10 ギガビットイーサネットからギガビットイーサネットに設定を変更するプロセスをブレイクインと呼びます。40G ポートを 10G ポートにブレイクアウトする場合、得られたポートには 3 タブルの命名規則を使って番号が割り当てられます。たとえば、2 番目の 40 ギガビットイーサネットポートのブレイクアウトポートには 1/49/1、1/49/2、1/49/3、1/49/4 という番号が割り当てられます。



- (注) 40G ポートを 4x10G モードにブレイクアウトするか、100G ポートを 4x25G モードにブレイクアウトすると、ブレイクアウトポートが管理上有効な状態になります。以前のリリースからのアップグレードでは、復元された設定によって、ポートの適切な管理状態が復元されます。



- (注) 40 ギガビットイーサネットから 10 ギガビットイーサネットにブレイクアウトするか、10 ギガビットイーサネットから 40 ギガビットイーサネットにブレイクインすると、すべてのインターフェイス設定がリセットされ、影響を受けたポートは管理上使用できなくなります。これらのポートを使用可能にするには、**no shut** コマンドを使用します。



- (注) 新しい QSFP+ 40 Gb トランシーバは、Cisco Nexus 3600 プラットフォーム スイッチでサポートされています。新しい QSFP+ (40-Gb) トランシーバには、4 つの 10Gb SFP-10G-LR トランシーバとして分割されるケーブルがあります。これを使用するには、ポートを 4x10G モードにする必要があります。ブレイクアウト ケーブルを使用している場合は、その 40G ポートを 4x10G モードで動作させる必要があります。

40 ギガビットイーサネットポートを 4 つの 10 ギガビットイーサネットポートにブレイクアウトし、4 つの 10 ギガビットイーサネットポートを 40 ギガビットイーサネットポートに動的にブレイクインする機能により、永続的に定義せずに、任意のブレイクアウト対応ポートを 40 ギガビットイーサネットまたは 10 ギガビットイーサネットモードで動作させることができます。

SVI 自動ステート

スイッチ仮想インターフェイス（SVI）は、デバイスの VLAN のブリッジング機能とルーティング機能間の論理インターフェイスを表します。デフォルトでは、VLAN インターフェイスが VLAN で複数のポートを有する場合、SVI は VLAN のすべてのポートがダウンするとダウン状態になります。

自動ステートの動作は、対応する VLAN のさまざまなポートの状態によって管理されるインターフェイスの動作状態です。VLAN の SVI インターフェイスは、VLAN に STP フォワーディングステートのポートが少なくとも1個ある場合にアップになります。同様に、このインターフェイスは最後の STP 転送ポートがダウンするか、別の STP 状態になったとき、ダウンします。

デフォルトでは、自動ステートの計算はイネーブルです。SVI インターフェイスの自動ステートの計算をディセーブルにし、デフォルト値を変更できます。

Cisco Discovery Protocol

Cisco Discovery Protocol（CDP）は、すべてのシスコ デバイス（ルータ、ブリッジ、アクセスサーバ、およびスイッチ）のレイヤ 2（データリンク層）で動作するデバイス検出プロトコルです。ネットワーク管理アプリケーションは CDP を使用することにより、既知のデバイスのネイバーであるシスコ デバイスを検出することができます。CDP を使用すれば、下位レイヤのトランスペアレント プロトコルが稼働しているネイバー デバイスのデバイス タイプや、簡易ネットワーク管理プロトコル（SNMP）エージェントアドレスを学習することもできます。この機能によって、アプリケーションからネイバー デバイスに SNMP クエリーを送信できます。

CDP は、サブネットワークアクセスプロトコル（SNAP）をサポートしているすべてのメディアで動作します。CDP はデータリンク層でのみ動作するため、異なるネットワーク層プロトコルをサポートする 2 つのシステムで互いの情報を学習できます。

CDP が設定された各デバイスはマルチキャスト アドレスに定期的にメッセージを送信して、SNMP メッセージを受信可能なアドレスを 1 つまたは複数アドバタイズします。アドバタイズには、存続可能時間（保持時間）や情報も含まれています。これは、受信側のデバイスが CDP 情報を破棄せずに保持する時間の長さです。各デバイスは他のデバイスから送信されたメッセージも待ち受けて、ネイバー デバイスについて学習します。

このスイッチは、CDP バージョン 1 とバージョン 2 の両方をサポートします。

CDP のデフォルト設定

次の表は、CDP のデフォルト設定を示したものです。

Table 3: CDP のデフォルト設定

機能	デフォルト設定
CDP インターフェイス ステート	有効
CDP タイマー（パケット更新頻度）	60 秒
CDP ホールドタイム（廃棄までの時間）	180 秒
CDP バージョン 2 アドバタイズ	有効 (Enabled)

errdisable ステート

あるインターフェイスが **errdisable** ステートであるというのは、そのインターフェイスが管理上は（**no shutdown** コマンドにより）イネーブルになっていながら、実行時に何らかのプロセスによってディセーブルになっていることを指します。たとえば、UDLD が単方向リンクを検出した場合、そのインターフェイスは実行時にシャットダウンされます。ただし、そのインターフェイスは管理上イネーブルであるため、そのステータスは **errdisable** として表示されます。いったんインターフェイスが **errdisable** ステートになったら、手動で再イネーブル化する必要があります。あるいは、自動タイムアウト回復値を設定しておくこともできます。**errdisable** 検出はすべての原因に対してデフォルトでイネーブルです。自動回復はデフォルトでは設定されていません。

インターフェイスが **errdisable** ステートになった場合は、**errdisable detect cause** コマンドを使用して、そのエラーに関する情報を取得してください。

errdisable の特定の原因に対する **errdisable** 自動回復タイムアウトを設定する場合は、**time** 変数の値を変更します。

errdisable recovery cause コマンドを使用すると、300 秒後に自動回復します。回復までの時間を変更する場合は、**errdisable recovery interval** コマンドを使用して、タイムアウト時間を指定します。指定できる値は 30 ～ 65535 秒です。

インターフェイスが **errdisable** からリカバリしないようにするには、**no errdisable recovery cause** コマンドを使用します。

errdisable recover cause コマンドには、以下のさまざまなオプションがあります。

- **all** : すべての原因からの回復タイマーをイネーブル化します。
- **bpduguard** : ブリッジプロトコルデータユニット（BPDU）ガードの **errdisable** ステートからの回復タイマーをイネーブル化します。
- **failed-port-state** : スパニング ツリー プロトコル（STP）のポート設定状態障害からの回復タイマーをイネーブル化します。
- **link-flap** : リンクステートフラッピングからの回復タイマーをイネーブル化します。

- **pause-rate-limit** : ポーズレートリミットの **errdisable** ステートからの回復タイマーをイネーブル化します。
- **udld** : 単方向リンク検出 (UDLD) の **errdisable** ステートからの回復タイマーをイネーブル化します。
- **loopback** : ループバック **errdisable** ステートからの回復タイマーをイネーブル化します。

特定の原因に対し、**errdisable** からの回復をイネーブルにしなかった場合、**errdisable** ステートは、**shutdown** および **no shutdown** コマンドを入力するまで続きます。原因に対して回復をイネーブルにすると、そのインターフェイスの **errdisable** ステートは解消され、すべての原因がタイムアウトになった段階で動作を再試行できるようになります。エラーの原因を表示する場合は、**show interface status err-disabled** コマンドを使用します。

デフォルト インターフェイス

デフォルトインターフェイス機能を使用して、イーサネット、ループバック、管理、VLAN、およびポートチャンネルインターフェイスなどの物理インターフェイスおよび論理インターフェイスの両方に対する設定済みパラメータを消去できます。

デバウンス タイマー パラメータについて

デバウンスタイマーを設定するとリンク変更の通知が遅くなり、ネットワークの再設定によるトラフィック損失が減少します。デバウンス タイマーはイーサネット ポートごとに個別に設定します。遅延時間はミリ秒単位で指定できます。遅延時間の範囲は0～5000 ミリ秒です。デフォルトでは、デバウンス タイマーは 100 ms に設定されており、デバウンス タイマーは動作しません。このパラメータが0 ミリ秒に設定されると、デバウンスタイマーはディセーブルになります。



Caution

デバウンスタイマーをイネーブルにするとリンクアップおよびリンクダウン検出が遅くなり、デバウンス期間中のトラフィックが失われます。この状況は、一部のレイヤ2とレイヤ3プロトコルのコンバージェンスと再コンバージェンスに影響する可能性があります。

MTU 設定

スイッチは、フレームをフラグメント化しません。そのためスイッチでは、同じレイヤ2ドメイン内の2つのポートに別々の最大伝送単位 (MTU) を設定することはできません。物理イーサネット インターフェイス別 MTU はサポートされていません。代わりに、MTU は QoS クラスに従って設定されます。MTU を変更する場合は、クラスマップおよびポリシーマップを設定します。



Note インターフェイス設定を表示すると、物理イーサネットインターフェイスに1500というデフォルトのMTUが表示されます。

カウンタ値

設定、パケットサイズ、増分カウンタ値、およびトラフィックについては、次の情報を参照してください。

設定	パケットサイズ	増分カウンタ	トラフィック
L2ポート：MTU設定なし	6400 および 10000	ジャンボ、ジャイアント、および入力エラー	Dropped
L2ポート：ネットワーク QoS設定のジャンボ MTU 9216	6400	Jumbo	Forwarded
L2ポート：ネットワーク QoS設定のジャンボ MTU 9216	10000	ジャンボ、ジャイアント、および入力エラー	Dropped
network-qos 設定のデフォルト レイヤ 3 MTU およびジャンボ MTU 9216 のレイヤ 3 ポート	6400	Jumbo	パケットは CPU にパントされ（CoP P設定の対象）、フラグメント化されてから、ソフトウェアによって転送されます。
network-qos 設定のデフォルト レイヤ 3 MTU およびジャンボ MTU 9216 のレイヤ 3 ポート	6400	Jumbo	パケットは CPU にパントされ（CoP P設定の対象）、フラグメント化されてから、ソフトウェアによって転送されます。
network-qos 設定のデフォルト レイヤ 3 MTU およびジャンボ MTU 9216 のレイヤ 3 ポート	10000	ジャンボ、ジャイアント、および入力エラー	Dropped
network-qos 設定のジャンボ レイヤ 3 MTU およびジャンボ MTU 9216 のレイヤ 3 ポート	6400	Jumbo	フラグメンテーションなしで転送されます。

設定	パケット サイズ	増分カウンタ	トラフィック
network-qos 設定のジャンボ レイヤ 3 MTU およびジャンボ MTU 9216 のレイヤ 3 ポート	10000	ジャンボ、ジャイアント、および入力エラー	Dropped
ジャンボ レイヤ 3 MTU およびデフォルト L2 MTU 設定のレイヤ 3 ポート	6400 および 10000	ジャンボ、ジャイアント、および入力エラー	Dropped



(注)

- CRC 正常の 64 バイト未満のパケット：ショート フレームカウンタが増加します。
- CRC 不良の 64 バイト未満のパケット：runt カウンタが増加します。
- CRC 不良の 64 バイトを超えるパケット：CRC カウンタが増加します。

ダウンリンク遅延

Cisco Nexus 3048 スイッチのリロード後、ダウンリンク RJ-45 ポートの前に、アップリンク SFP+ポートを動作可能にできます。SFP+ポートが有効になるまで、ハードウェアで RJ-45 ポートの有効化を遅らせる必要があります。

リロード中に、指定したタイムアウト後にのみハードウェアでダウンリンク RJ-45 ポートを有効にするタイマーを設定できます。このプロセスにより、アップリンク SFP+ポートが最初に動作可能になります。タイマーは、**admin-enable** であるポートに対してのみハードウェアで有効になります。

デフォルトではダウンリンク遅延は無効になっているため、明示的に有効にする必要があります。有効にした場合、遅延タイマーが指定されていないと、デフォルトの遅延 20 秒に設定されます。

物理イーサネットのデフォルト設定

次の表に、すべての物理イーサネット インターフェイスのデフォルト設定を示します。

パラメータ	デフォルト設定
デュプレックス	オート（全二重）
カプセル化	ARPA

パラメータ	デフォルト設定
MTU ¹ 。	1500 バイト
ポート モード	アクセス (Access)
スピード	オート (10000)

¹ MTU を物理イーサネット インターフェイスごとに変更することはできません。MTU の変更は、QoS クラスのマップを選択することにより行います

インターフェイス情報の表示

定義済みインターフェイスに関する設定情報を表示するには、次のうちいずれかの手順を実行します。

コマンド	目的
switch# show interface type slot/port	指定したインターフェイスの詳細設定が表示されます。
switch# show interface type slot/port capabilities	指定したインターフェイスの機能に関する詳細情報が表示されます。このオプションは、物理インターフェイスにしか使用できません。
switch# show interface type slot/port transceiver	指定したインターフェイスに接続されているトランシーバに関する詳細情報が表示されます。このオプションは、物理インターフェイスにしか使用できません。
switch# show interface brief	すべてのインターフェイスのステータスが表示されます。
switch# show interface flowcontrol	すべてのインターフェイスでフロー制御設定の詳細なリストを表示します。

show interface コマンドは、EXEC モードから呼び出され、インターフェイスの設定を表示します。引数を入力せずにこのコマンドを実行すると、スイッチ内に設定されたすべてのインターフェイスの情報が表示されます。

次に、物理イーサネット インターフェイスを表示する例を示します。

```
switch# show interface ethernet 1/1
Ethernet1/1 is up
Hardware is 1000/10000 Ethernet, address is 000d.eca3.5f08 (bia 000d.eca3.5f08)
MTU 1500 bytes, BW 10000000 Kbit, DLY 10 usec,
    reliability 255/255, txload 190/255, rxload 192/255
Encapsulation ARPA
Port mode is trunk
full-duplex, 10 Gb/s, media type is 1/10g
Input flow-control is off, output flow-control is off
Auto-mdix is turned on
Rate mode is dedicated
Switchport monitor is off
```

```

Last clearing of "show interface" counters never
5 minute input rate 942201806 bytes/sec, 14721892 packets/sec
5 minute output rate 935840313 bytes/sec, 14622492 packets/sec
Rx
 129141483840 input packets 0 unicast packets 129141483847 multicast packets
 0 broadcast packets 0 jumbo packets 0 storm suppression packets
8265054965824 bytes
 0 No buffer 0 runt 0 Overrun
 0 crc 0 Ignored 0 Bad etype drop
 0 Bad proto drop
Tx
 119038487241 output packets 119038487245 multicast packets
 0 broadcast packets 0 jumbo packets
7618463256471 bytes
 0 output CRC 0 ecc
 0 underrun 0 if down drop      0 output error 0 collision 0 deferred
 0 late collision 0 lost carrier 0 no carrier
 0 babble
 0 Rx pause 8031547972 Tx pause 0 reset

```

次に、物理イーサネットの機能を表示する例を示します。

```

switch# show interface ethernet 1/1 capabilities
Ethernet1/1
  Model:                734510033
  Type:                 10Gbase-(unknown)
  Speed:               1000,10000
  Duplex:              full
  Trunk encap. type:   802.1Q
  Channel:             yes
  Broadcast suppression: percentage(0-100)
  Flowcontrol:         rx-(off/on),tx-(off/on)
  Rate mode:           none
  QOS scheduling:      rx-(6q1t),tx-(1p6q0t)
  CoS rewrite:         no
  ToS rewrite:         no
  SPAN:                yes
  UDLD:                yes
  MDIX:                no
  FEX Fabric:         yes

```

次に、物理イーサネット トランシーバを表示する例を示します。

```

switch# show interface ethernet 1/1 transceiver
Ethernet1/1
  sfp is present
  name is CISCO-EXCELIGHT
  part number is SPP5101SR-C1
  revision is A
  serial number is ECL120901AV
  nominal bitrate is 10300 Mbits/sec
  Link length supported for 50/125mm fiber is 82 m(s)
  Link length supported for 62.5/125mm fiber is 26 m(s)
  cisco id is --
  cisco extended id number is 4

```

次に、インターフェイスステータスの要約を表示する例を示します（出力の一部を割愛してあります）。

```

switch# show interface brief

```

Ethernet Interface	VLAN	Type	Mode	Status	Reason	Speed	Port Ch #
Eth1/1	200	eth	trunk	up	none	10G(D)	--
Eth1/2	1	eth	trunk	up	none	10G(D)	--
Eth1/3	300	eth	access	down	SFP not inserted	10G(D)	--
Eth1/4	300	eth	access	down	SFP not inserted	10G(D)	--
Eth1/5	300	eth	access	down	Link not connected	1000(D)	--
Eth1/6	20	eth	access	down	Link not connected	10G(D)	--
Eth1/7	300	eth	access	down	SFP not inserted	10G(D)	--
...							

次に、CDP ネイバーを表示する例を示します。

```
switch# show cdp neighbors
Capability Codes: R - Router, T - Trans-Bridge, B - Source-Route-Bridge
                  S - Switch, H - Host, I - IGMP, r - Repeater,
                  V - VoIP-Phone, D - Remotely-Managed-Device,
                  s - Supports-STP-Dispute

Device ID         Local Intrfce   Hldtme   Capability   Platform     Port ID
d13-dist-1        mgmt0          148      S I          WS-C2960-24TC Fas0/9
n5k(FLC12080012)  Eth1/5         8        S I s        N5K-C5020P-BA Eth1/5
```


翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。